知立市議会会派行政視察報告書

正和会　川合正彦

視察日時　平成31年1月22日（火）
視 察 先　福岡県春日市
視察内容　コミュニティースクールの取り組みについて

1,事業の目的と背景について

平成10年代初めころから学校を始め教育全体が抱える課題が多発。いじめ、不登校などの問題、教員の多忙化、家庭の教育に対しての無関心、過干渉、核家族化の進行、地域の規範意識の低下、性犯罪などの課題が山積。それらの解決に向け、学校、地域、家庭の三者の連携によるまさに三位一体の「ともに育てる」共育の基盤整備が求められ平成14年学校教育基本計画が制定される。そして地域と学校の双方向の連携を目指し平成17年学校運営協議会を設置。①地域から学校に対し教育支援を、②学校から地域に対し地域貢献をと、それぞれの立場での協働の街づくり、教育体制づくりによる「社会総がかりでの教育」に向けコミュニティースクール事業の導入に踏み切ったもの。

国の動向

平成27年12月21日中央教育審議会の答申では、

▶すべての公立学校に置いて地域住民や保護者等が学校運営に参画する仕組みとして、学校運営協議会制度を導入した学校（コミュニティースクール）を目指すべき。

▶各教育委員会が、コミュニティースクールの推進を図っていくよう、現在任意設置となっている学校運営協議会の制度的位置づけの見直しも含めた方策を講じていくことが必要。

との議論を踏まえ、学校運営協議会の設置を促進するため平成29年度3月「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一が改正された。

所感　子供を取り巻く環境づくりとして理想的といえる。全国小、中学校義務教育学校の導入校はまだ16,7%の4,796校と少ないが今後さらに進展すると思われる。地域と学校の双方向で連携した協働の教育環境づくりは地域と学校のお互いを補完し、新教育指導要領の求める主体的な学びにもつながる。

2,事業の概要について

学校、家庭、地域がそれぞれ双方向に連携し豊かな子供の育成、教育の推進する事業。

学校運営協議会（学校、地域、家庭、学識者）と学校長が中心にそれぞれの主体が役割を担い相互の責任を責任を果たす「協働責任」の方式での事業。

↓

学校運営委員会で決定されたことを実行するための実働組織としてコミュニティー推進部を設置。学校運営委員会委員、教育員代表、保護者代表、地域代表、教育育委員会職員などが連携し実践活動が展開される。

年間予算合計　400万円　（市費約340万円　国・県補助約60万円）

■組織形態はA、B、Cの3タイプに分かれ地域性あわせ特色ある連携タイプを活かし事業展開されている。

A　合同部会形式タイプ（学校、家庭、地域の3者協働を主体とする。）

B　三部会形式タイプ　（学校、家庭、地域の各役割りを主体とする）

C　学校支援組織タイプ（地域、家庭による学校支援を主体とする）

■学校運営協議会の構成員

地域住民・保護者代表教職者、民生・児童委員、行政職員など20名（市教委が委嘱）

所見 ※校長の出張トーク

校長自らが地域へ出向く事業が行われている。これまでは学校のみの課題であったものが、地域住民や保護者を含めて話し合われ協議されるようになってきた。閉鎖的になりがちな教育現場を地域に開き課題を共有し相互協力することで、様々な問題の深刻化を防ぐと共に地域、家庭も含めた教育力の向上が図られている。

教育委員会の抱える外から見えない課題などはこの活動で多くは改善できる。学校教育のコミュニティー化を前進させるための施策提言に努める。

※市教委と学校の関係

学校も上からの指示では動かない。研究発表もしない。学校と地域とのパートナーシップづくりを重視し

教育本来の視点で学校運営がされている。内向きの閉塞感を破り子供目線の教育の実現が可能。

なぜ知立市も含め多くの自治体が中教審の答申に沿った教育改革ができないのか理解に苦しむ。

3,事業における成果について

家庭学習の習慣化による基礎力、基本的な学力の習得身についてきている。

保護者、地域住民が学校評価に参加することにより、学校の授業改善が図られ、学力、体力とも大幅な向上につながっている。→学力、体力とも全国上位ランク

▶教育水準の高さは転入増にもつながり、不動産業者も「この地域のウリ」にするほど。

「教育」から学校、家庭、地域連携による「共育」へ。子どもたちの地域への帰属意識や地域住民意識が高まり、地域への貢献意識、地域愛、郷土愛が醸成されている。

学校での、授業や事業、教育環境整備などにおいて地域住民や保護者の参加、支援が大きく進行している。

学校と、地域住民、保護者の相互理解、相互交流が進み学校対しての当事者意識が醸成されている。学校からの積極的な情報発信により学校の行事や学校自体に対しての理解が深まり学校をささえようとする地域の基盤づくりが進んでいる。

地域の夏祭りへの部活動としての生徒の参画進められている。

子供たち自身の夏祭り参加計画立案→事業実施（夏祭り参加）→反省会議（次年度に向けて）など地域事業に対しての積極的参加、地域住民との交流、相互理解の進展。

4,現状における事業の問題点と課題について

課題①　新しい人に入れ替わっていく場合、前任者と同様の意識を継承できるか。

課題②　かえって教員の多忙化につながっていかないか。

課題③　学校、地域、家庭が連携意識を維持することは難しい。体制維持、継承策が必要。

等が考えられる

所感　これまでの学校、家庭、地域の関係性を大幅に見直し、2020 年度から始まる新教育指導要領の求める主体的で体験的学習を具体的に実現するものであり、今後の教育環境整備に最も求められる事業の内容、教育概念である。この事業の求める学校、家庭、地域の双方向の連携による「共育」、同じ目的に向かっていける相互補完、などの教育委員会の今後の考え方や将来性を見通すセンスこそが一番の重要であり知立市の教育行政は教育の幅を広げる意味で大いに学ぶべき。

地域、家庭を含めたチーム学校を学区全体に広め、SSW（スクールソーシャルワーカー）などにおいても採用に踏み切れない現状維持からの脱却を知立市教育委員会に訴えたい。

知立市議会行政視察報告書

正和会　川合正彦

視察日時　平成31年1月23日（水）　午前9時39分～11時30分
視 察 先　佐賀県地場産品交流館　佐賀市松原４丁目６－１８「肥前通仙亭」
視察内容　肥前通仙亭の売茶の歴史継承に対しての取り組みについて

1,事業の背景と目的について(所感を含む)

八橋の在源寺を再興し、後に八橋無量寿寺を復興させこの地に売茶文化を広めた方巌売茶翁(1760～1828)が京都で修業を積む時期、師と仰ぎその生き方に感銘を受けた高遊外売茶翁(1675～1763)は佐賀の生んだ煎茶道の祖。

煎茶道を開き煎茶を通じ精神文化を世に広めた僧侶、高遊外売茶翁は江戸時代の京都文化の中心となる存在であった。禅宗の僧侶でもある高遊外の思想の根底には禅の思想と体制批判がうかがえ煎茶に精神的な方向性を感じる。

知立市の歴史文化にとっても方巌売茶翁とのかかわりの中で、時代は離れているが欠かせない人物。その文化的足跡や人となり、功績を守り継承する肥前通仙亭において煎茶文化と知立市の方巌売茶翁との思想的なつながりについて検証した。

この施設運営事業は行政が行っているものではなく、売茶翁の精神と煎茶道の心に感銘を受けた市民グループのチャーターメンバーが行っている。2年くらいこの施設運営委託を受けて始めたことがきっかけだが、経営的な困難を乗り越え15年続けている。売茶翁の煎茶道に対して姿勢やの思想的な魅力を伝えることを NPO の目的として継続している。もちろん手弁当的な運営でいつ辞めようかという部分もあると聞くが活動は積極的。

後世に残そうとか観光の施策というものではない。ただ佐賀らしいものを情報発信したいということが運営の目的。しかし売茶道の気骨さ最もエネルギーになっているようだ。

2,事業の概要・経緯について

市民活動としての事業開始をした経緯があり、運営的には市からの補助はない。指定管理設けていない。本来やりたいこと、やるべきことをはっきりさせているのでひも付き的な運営はふさわしくないとしている。きわめて同感。

定期的に「おもしろ講演会」を開催。参加料の一人6,000円が活動費になっている。

茶道具や掛け軸、書など資料や展示物は市外、県外の方から、（特に東京、横浜）の寄付によってなりたっている。

学術的には佐賀県の学芸員の指導を受けている。

3,事業の方向性について

あくまでも市民活動の中で運営を継続する。経営的な課題もあるが金銭以上の価値を伝えていく。若冲と高遊外売茶翁の関係が煎茶道と禅の思想、文化広めた。

当時、体　制を敵に回してでも伝えようとした、社会へのメッセージを市民活動の中で伝えようとする方向性。お茶を売ることは売茶の本来の目的ではないとしている。

4,事業における課題について

※高遊外売茶翁の末裔にあたる柴山さんとの関係

※経営的な課題解決のための物販や講演会も実施などの活動が税務署から問題を指摘された。本来氏がやるべき事業を行っているとの問題。

※物販藻経営上の理由で行っているが、モノを売ることは売茶翁の本来の精神に合わない。

※後継者が育っていないので、今後、事業 PR と共に人材発掘、育成に努める必要がある。

※行政の観光施策との折り合いをどうとるか。

所　感

煎茶道には流派もなく、お茶を施して人の心をいやすことが目的。人と人とのコミュニケーションツールとして用いられていた。しかしその根底には確固たる仏教思想、禅の思想がある。高遊外売茶翁の足跡や文化的な活動を知るにつけ時代は異なるが、方巌売茶翁の八橋 無量寿寺再興やかきつばた園、公園整備に寄せた社会思想を感じる。

高遊外は、王政復古を願って幕府体制を批判。江戸ではできない思想活動を京都で文人や知識人の中で開花させた。いまこの施設で市民活動として継承される原点では。

しかし NPO 活動も曲がり角に来ているようで、同じルーツを持つ知立市としては、何らかの交流事業ができればと思う。八橋かきつばた園、無量寿寺の歴史的考察を深めたい。